

佳作

思いやりの心を持って

香川県 高松市立太田中学校二年 松岡 優衣

毎日、朝の七時から、私の祖父は公園でボランティアをしている。私が小学二年生のころからだ。なぜ六年間も続けられてきたのだろうか。気になったので祖父のボランティアのお手伝いをするにしました。

朝七時、最初に管理事務所で机や椅子をふいたり、玄関やトイレのスリッパを並べたりした。祖父は掃除機をかけたり、パソコンや資料を並べたりしていた。

次に、公園でゴミ拾いをした。駐車場を歩いていると、お弁当の容器が二つ落ちていた。ゴミばさみで持ち上げると、タレのような液体がこぼれた。私は思わずさげんでしまった。祖父は、

「誰かが食べるだけ食べて、ゴミは持ち帰らずに捨てて行ったんだね。」

と言った。私は、お弁当を捨てる人がいるなんて知らなかったのでも衝撃を受けた。同時に怒りと悲しみがこみ上げてきた。歩いていくと、お弁当だけでなく、ペットボトルやたばこのすいながら、犬の毛玉などが落ちていた。それを拾うたびに心がチクチクした。あと少しで一周するという所で、花火の燃えかすが落ちているのを見つけた。祖父が、

「ここは花火禁止なのに。きまりは守ってほしい。」と言った。私は「ゴミを捨てる人は、どうせ誰かが拾ってくれるから、少しくらいポイ捨てしたってかまわないと思ってるのだろうか、自分がポイ捨てしたゴミを誰かが拾っていることを知らないのだろうか」と強く思った。

公園を一周して終えたとき、散歩をしていたおじさんが、

「朝からゴミ拾いするなんてえらいね。」

と言ってくれた。私は、その一言で一気に心や体が軽くなった。「ごみ拾い、がん張って良かった」という気持ちになった。

ゴミ拾いが終わって、私も祖父もびっしょり汗をかいた。祖父が、

「がん張ってくれたからジュース買ってあげるよ。」

と言って、ジュースを買ってくれた。爽快で晴れ晴れとした気分になった。

「なんでおじいちゃんは、毎日ボランティアをしているの？しんどくないの？」

と私は聞きたかったことを聞いた。すると、祖父は、「ここを使う人が気持ち良く過ごせるようにするためだよ。あまりしんどくないよ。」

と言った。私は感心した。「ボランティアをしている人は思いやりの心を持った人ではないか」と思った。

私はこれから、思いやりの心を持って生活するようになりたいと思う。祖父のようになるために。